未来創造科

斉藤　剛志　　瀬戸　辰徳　　小野里　健太　　高山　慶介

主題「社会と関わり合いながら探究し、『実現したい未来』を創造する生徒」の育成

1　主題設定の理由

本校では、総合的な学習の時間を未来創造科と改編して学習を進めている。詳細については、未来創造科ガイドブックを参照されたい(図１)。中央教育審議会の生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループ（2026）では、「『質の高い探究』の『実現可能性の確保』に不可欠な視点として、社会との連携の推進や、そのための具体的な手立てを検討してはどうか」と示されている。このことから、質の高い探究に向けて、外部機関とのつながりを確保していく具体的な提案が求められている。

<図1　未来創造科ガイドブック>

昨年度は、生徒が社会とのつながりを意識しながら探究を進められるよう、企業や公民館等の地域資源と連携した学習活動を実践してきた。その成果として、令和７年度に実施したアンケートでは、「自分で国や社会を変えられると思いますか」という質問に対し、「はい」と回答した生徒の割合は 33.6%となり、令和６年度の 22.6%から 11.0 ポイント増加した。この結果は、生徒が地域社会や企業等との協働を通して、自らの探究活動が社会と結び付いていることを実感し、自身の提案や行動が社会に働きかける可能性を認識するようになったことによるものと考えられる。また、現代的な諸課題を自分自身の課題として捉え、各教科等で培った資質・能力を活用しながら、社会との関わりの中で課題解決に向けた探究を進める姿も見られた。一方で、「自分で国や社会を変えられる」と肯定的に回答した生徒は約３割にとどまり、依然として約７割の生徒は、自らの提案や行動が社会に影響を及ぼし得るという実感をもつには至っていないことが明らかとなった。このことから、生徒が探究活動を通して社会との関わりをより具体的に実感し、自らの学びや提案が社会にどのような価値をもたらすのかを認識できる学習過程を一層充実させる必要があると考えられる。

以上のことから、今年度も研究主題を「社会と関わり合いながら探究し、『実現したい未来』を創造する生徒」の育成とし、探究的な学びを実現するための具体的な手立てを通して実践研究を進める。

2　主題に迫るための具体的な取組

（1）社会とつながる機会を充実させるための手立て

① 未来創造 Day の実施と主体的に探究をデザインするための単元計画の再編

未来創造科において、２単位時間以上連続して生徒が自ら計画して探究活動を行う時間を「未来創造 Day」とし、外部機関に訪問して情報を収集したり、理科室で実験を行うことで仮説を検証したりと学習方法を生徒自らデザインしながら、探究を進める時間を確保している。図２は、前橋国際芸術祭に携わるアーティストや運営を担当している方々を本校に招き、これまでの探究の成果を発表したり、今後の探究について相談したりしている様子である。昨年度は各学期１回程度の実施であったが、今年度は各学期で複数回実施する。加えて、それぞれの学期に実施する異学年交流会の前後になるよう設定する。異学年交流会をはさむように未来創造 Day を設けることで、同じ講座の異学年の仲間と実践を通して学んだことを振り返ったり、次回の実践へ向けて見通しをもったりすることができると考えた。また、これまでは、未来創造科シンポジウ



<図2　未来創造 Day で探究について相談している様子>

ム（第１・２学年は未来創造科ミニシンポジウム）や異学年交流会へ向けて、スライド資料を作成するために、多くの授業時間を確保していたが、技術分野や各教科等の学びを基に、生成 AI 等を活用することで、スライド資料を作成する授業時間を減らし、未来創造 Day に充てる授業時間を確保している。

また、昨年度までは授業者が単元構想に未来創造 Day を組み込み、探究のどの場面で実施するかを計画していたが、今年度は、探究のどの場面で未来創造 Day を行うかについても生徒が自ら考え、実践できるようにした。これにより、生徒が自らの探究の計画を立てながら活動することができ、探究を主体的にデザインする力の向上につながることを目指した。さらに、外部機関とつながりをもって探究を行うことができた生徒は、その成果や外部機関とつながるためのプロセスについて同じ領域の仲間へ発表し、情報を共有した。この活動を通して、発表者は自信を深め、発表を聞く生徒は同じ領域の仲間の成功体験に触れ、「自分にもできる」と前向きに外部機関と関わろうとすると考えた。

② 未来創造 Day や異学年交流会における生徒の様子

未来創造 Day を活用しながら、生徒の主体的な探究を促すため、次のような活動を位置付けた。

小単元①では、単元の学習が始まる際に未来創造科ガイダンスとして行った。「解決したい」や「何とかしなければならない」といった思いをもちながら探究を進めるために、現代的な諸課題に関する先行研究や社会の様々な取組を調べたり、実際に現代的な諸課題の解決に向けて取り組んでいる企業や団体にインタビューをしたりして、現代的な諸課題についての理解を深められるようにしていった（図３）。第２・３学年の生徒には、昨年度から継続的に探究することを考えている生徒もおり、そうした生徒は課題の設定に限らず、情報の収集の過程としてインタビューする姿も見られた。小単元①を終えている生徒や小単元②を始めた生徒がいるタイミングで、異学年交流会を行った。異学年交流会では、ガイダンスや小単元①の探究を通して分かった現代的諸課題について意見交換する姿や、次回の未来創造 Day に向けて外部機関にどのように情報の収集を行うとよいか話し合う姿が見られた。



＜図３　オンラインで企業から情報の収集している様子＞

小単元②の課題の設定や情報の収集の過程では、未来創造 Day として１年生では公民館へ訪問し、２・３年生では市役所や県庁、群馬大学と連携し、オンラインで講話を聞き、自分の興味のあることや疑問に思っていることを質問することで、実際の社会での出来事や問題を自分事として受け止めながら、探究を進める姿が見られた（図４）。中間検討会では群馬大学や学校評議員、保護者等の方々に助言をいただきながら、これまでの探究の成果と今後の探究の見通しについて話し合った。これにより、次回の未来創造 Day に向けてどのような外部機関に情報の収集や現代的諸課題の解決へ向けた相談や提案を行うとよいか話し合う姿が見られた。夏休みに個人やチームで行う実践や２学期が始まってすぐに設定されていた未来創造 Day では、保護者や地域の方、企業の方など校内外の様々な方に、自分の提案を説明したり、実際に体験してもらったりできるようにしていた。生徒は発表を聞いてくれた方との対話を大切にし、自分たちの提案に対する意見や助言を生かして、探究の改善につなげることができるようになる。学校行事と関連付けながら、探究の成果を発信していく場を充実させることで、自分の学びが社会とつながり、広がっていくことを実感する



＜図４　公民館に訪問している様子＞

貴重な経験となっていくと考える。

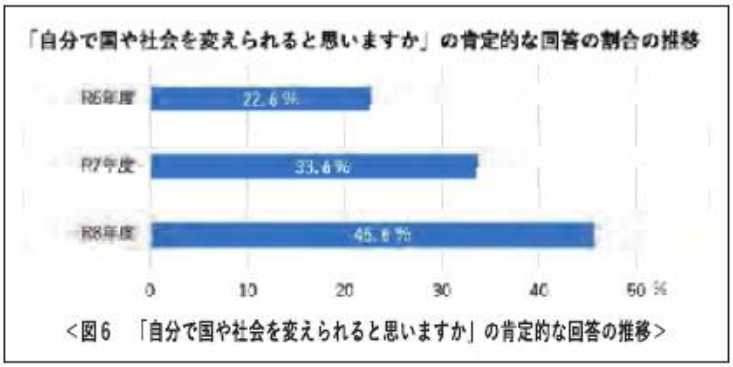
小単元③では、これまでの探究を基に「未来を創る（未来へつなぐ）」ために自分がどのような提案を行うか探究し、実践を進めていく。未来創造科シンポジウムの前後と３学期の異学年交流会後に、未来創造 Day を実施し、実現したい未来へ向けての提案を実現するために外部機関から情報の収集をしたり、外部機関へ提案したり、地域の方々を招いて探究の成果を体験してもらう場を設けたりする。異学年交流会では、３年生は自分の探究の成果やその過程を下級生へと伝え、１・２年生は上級生から助言をもらいながら、今年度の探究を振り返り、来年度の探究についての考えを深めていく（図５）。



＜図５　異学年交流会の様子＞

③ 成果及び課題

成果として、全校生徒へ行ったアンケートにおける「自分で国や社会を変えられると思いますか」について、約 45.6%の生徒が「はい」と回答し、令和６年度の約 22.6%、令和７年度の約 33.6%と比較して増加した（図６）。この肯定的な生徒の割合は、第１学年では約 40%、第２学年では約 46%、第３学年では約 51%であった。また、肯定的な回答をした生徒へインタビュー調査を行うと、第１学年の生徒は「探究しているマイクロプラスチック問題も専門機関の人と協力すれば、きっと解決できると思う」と自分自身の探究を前向きに捉える回答が複数あった。また、第２・３学年の生徒は「未来創造 Day で実際にイベントを開催して、地震に備えることの大切さを伝えることができたと思う。中学生でもイベントを開催できたので、イベントの開催を続けていくことで、少しずつ社会を変えることができると思う」や「友達が体育館で効率のよい発電方法の展示を行ったり、発電所の人と相談したりしていて、友達ができるのだから、自分にも頑張ればできるのではないかなと思った」といった回答があった。上記のような回答から、第１学年の生徒は未来創造科の学習を通して、自分の考えた現代的諸課題の解決策を外部機関に提案することで国や社会を変えることができると考える生徒が多いと考えられる。しかし、多くの回答は提案に具体性が乏しいため、小単元③の学習を通して提案の実現へ向けて学習に取り組む必要があると考える。第２・３学年の生徒は実際に実現できた提案や仲間の実践に触れ、未来創造科の学習を通して、実際に自分たちが国や社会に影響を与えることができると考えている生徒が多いと考えられる。これらのことから、肯定的な生徒の割合が増加した要因の一つとして、未来創造科の学習において、生徒自身の考えた提案を未来創造 Day 等の機会を通して実践できたことが挙げられる。特に、第２・３学年の未来創造 Day などの場面において、外部機関に対して提案したり、地域の方を対象にワークショップを開催したりと実際に自分の提案を実践できた生徒の肯定的な回答は約 78%と高かった。このことから、「自らの提案を実践すること」と「自分で国や社会を変えられると思う」ことには相関関係があると考えられる。今後も、探究を通して導き出した提案を実践できる生徒が増えていくことで、社会に出たときに立ちはだかるであろう様々な現代的な諸課題に対して、自ら解決策を考え、実行し、振り返りながら、よりよい社会の実現や幸福な人生の担い手として歩みを進めようとする生徒が育成できるであろう。



＜図６　「自分で国や社会を変えられると思いますか」の肯定的な回答の推移＞

課題として、インタビュー調査を通して、自分の提案を実践できなかった生徒は、外部機関とつながることの難しさを感じていたり、提案に具体性が欠けていたりすることが明らかになった。生徒同士が外部機関とつながった経験を語り合ったり、異学年交流会等の機会で提案を実現させるために意見交換を継続したりすることで、自分の提案を実践でき、「自分で国や社会を変えられると思う」と回答する生徒が増え、社会と関わり合いながら探究し、「実現したい未来」を創造する生徒が増えていくと考える。また、生徒が目指す「実現したい未来」や探究する課題について、生活や社会との関わりの中でより自分事化された課題となるよう「質の高い課題の設定」へと練り上げていくことで、より主体的に探究を進めていくことができる。これまでにも、授業内で同じ領域を探究する仲間と話し合ったり、異学年交流会において先輩や後輩と協議したりする活動を行っているが、より質の高い課題の設定を行うために、未来創造 Day の活用を進めたい。そうすることで、図７の「『問いかけ』の視点の例」で提示されているような「生徒自身の日々の生活や将来の生き方に関わるものであるか」という視点や「『他者』『社会』『自然』にとってどのような意味や魅力のあるものか」という視点を生徒自身がもつことができると考える。



<図７「課題の質」の向上に向けた考え方（課題の設定の場面） 出典：中央教育審議会, 2026, p.15>

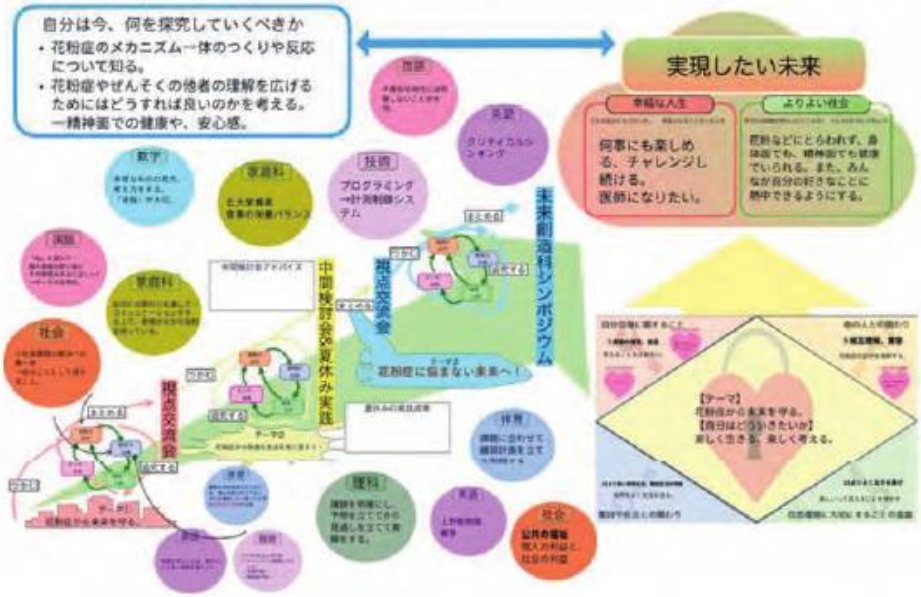
（２）各教科等で培った資質・能力を活用しながら、探究を進めるための手立て

① これまでの探究を振り返り、今後の見通しをもつための未来創造科クロス MAP の活用

本校では、教科等横断的な学びを実現していくために、「未来創造科クロス MAP」を活用している（図８）。また、教科等横断的な視点に立った資質・能力と併せて、未来創造科で「自分で行動に移すこと」によって社会との関わりの中で得られる概念的な知識をより充実させていくことで、「学びを統合し、現在を見つめる力」を身に付けていくことができると考えられる。

今年度は、授業の振り返りの際に、この未来創造科クロス MAP を用いて、本時の探究でどの教科等の学びが生かされたか振り返ることで、各教科等で学んだ知識及び技能や見方・考え方、学習の進め方が探究を進める中で活用されていることをより自覚できるようにしていく。

未来創造科クロス MAP の左上の「自分は今、何を探究していくべきか」の欄を実現したい



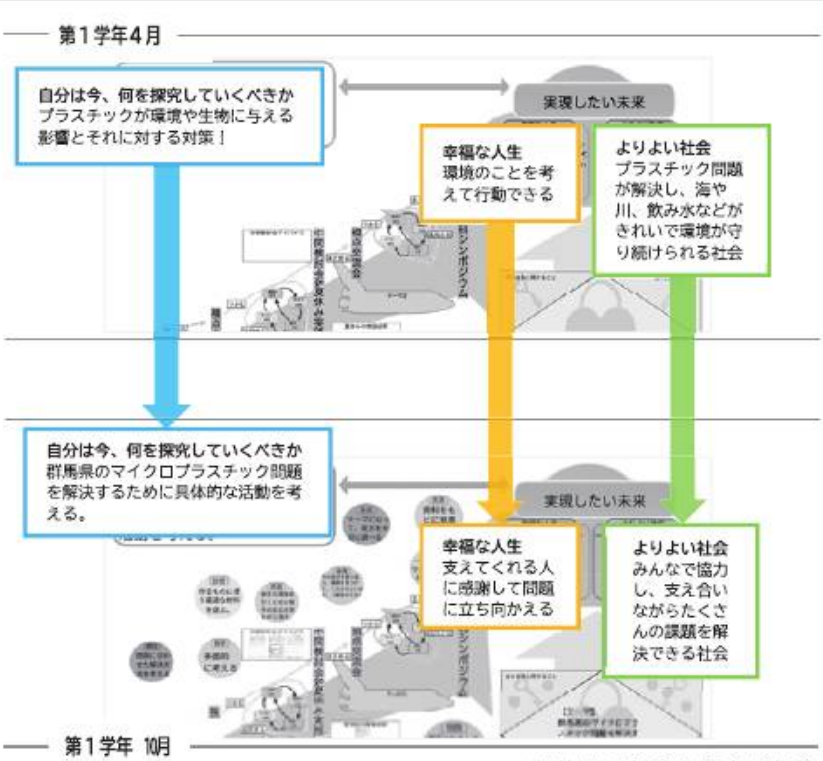
<図８　生成した未来創造科クロス MAP>

未来と照らし合わせ、加筆・修正を繰り返しながら探究を進められるようにしていくことで、自分は今何を探究していくべきかを見直すことができるようになる。単位時間や小単元ごとの振り返りだけでなく、単位時間の途中にも振り返るよう促し、自身の探究についての振り返りを充実させていくことで、未来創造科を各教科等で学んだことを活用・発揮する場として位置付けられる。これによって、各教科等の学びがより深い学びへつながったり、目指す方向に向けて自ら軌道修正しながら進めていったりすることができると考える。

また、各小単元のまとめ・表現の場面で、スライドを作成する際、１枚あるいは一まとまりのスライドごとに、活用した教科のエレメントを貼り付けるようにすることで、各教科等の学びの必要性を実感したり、学んだことが未来創造科の探究のサイクルの中で活用できることを自覚したりすると考えた。また、発表等で他者のスライドを見る際には、教科等の学びを探究に生かす見方や考え方の新たな気付きも得られるとも考えられる。

② 未来創造科クロス MAP を活用した生徒の実践

生徒はそれぞれの小単元において、探究を進めていく中で、課題の設定や整理･分析などの学習活動を振り返る場面で未来創造科クロス MAP を振り返った。未来創造科クロスMAPへ記述する内容は探究が進むに連れて変化した（図９）。図９に示した生徒は、第１学年４月では、小単元①を探究しているため、探究すべきこととして、マイクロプラスチックが環境や生物に与える影響やその対策について記載していた。小単元①の探究を通して、群馬県の河川でもマイクロプラスチックが検出されていることやその原因のほとんどが飲料用のペットボトルであることを明らかにし、第１学年 10 月には、マイクロプラスチック問題を解決するための具体的な活動を探究すべきこととして設定した。この生徒は最終的には、市街地や温泉街へマイボトル使用の啓発活動を行うことを企画し、市町村の観光協会などに提案していた。また、「自分は今、何を探究していくべきか」の更新に伴って、実現したい未来も変化し、自分が関心をもったマイクロプラスチックだけでなく、より多くの人と課題に立ち向かい、解決できる未来を実現したい未来としていた。



※枠及び矢印は筆者が加筆

<図９　未来創造科クロスマップへの記述内容の変化>

さらに、中間検討会や講座内発表会に向けて作成したスライドには、未来創造科エレメントを掲載した（図 10）。発表している生徒は、プレゼンテーション



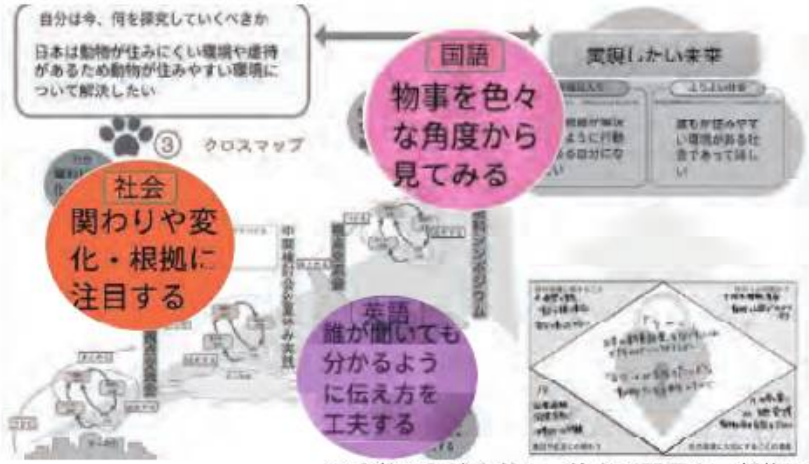
※生徒の記述を基に、配置は筆者が加筆・修正

<図 10　エレメントを入れた生徒のスライド資料>

の際に、必要に応じて各教科等の学びを紹介し、中間検討会などの異学年交流会では、下級生が、「私も（３年生のように）理科の学習を生かして、課題に対応した解決策になっているかもう一度振り返りたい」と上級生のエレメントを基に、各教科等の学びを生かそうとする生徒の記述も多く見られた。

③ 成果及び課題

成果として、生徒へ行ったインタビュー調査では、前述のように未来創造 Day に関連した回答が多かったが、「社会の学習のように、『多面的・多角的』な視点をもって情報収集したから、（外部機関に）提案できるくらい説得力のある解決策を考えることができた。」といった各教科等とのつながりについて回答する生徒も多くいた。生徒の作成したエレメントの記述内容について、これまでは理科や社会で扱う自然環境に関連する語句や国語や英語の教材として扱うコンテンツについて記述している生徒が多かったが、今年度のエレメントの記述では各教科等の資質・能力に関連する記述をする生徒が増加した（図 11）。これは、情報の収集や整理・分析、まとめ・表現などの過程において、各教科等の学びをどのように生かせるか考える学習活動を行ったことで、生徒同士が各教科等の学びについて話し合い、その学びをどのように未来創造科に生かすことができるか考えたことが要因だと考えられる。インタビュー調査での生徒の発言のように、各教科等の学びによって未来創造科での探究がよりよいものになり、外部機関への提案につながった可能性も示唆された。



※生徒の記述を基に、筆者が配置を一部修正

＜図 11　生徒の作成した未来創造科クロスマップの記述＞

3　今後の展望

各学期に未来創造科の探究において、未来創造 Day や異学年交流会を計画的に単元に位置付けたことや未来創造科クロスマップを用いて各教科等の学びを探究に生かすことができるようにしたことは、社会と関わり合いながら探究し、『実現したい未来』を創造する生徒の育成につながったと考えられる。今後は、より多くの生徒が探究を通して導き出した提案を実現することができるよう、支援を続けていきたい。また、より質の高い課題の設定へ向けて単元計画を構想することや生成 AI などの情報通信技術を探究でどのように活用するかについても、模索していく必要がある。

＜参考文献＞

中央教育審議会（2026）「中央教育審議会教育課程部会生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループ（第７回）【資料】（1/3）質の高い探究に向けた社会との連携等の推進について」
中央教育審議会（2026）「中央教育審議会教育課程部会生活、総合的な学習・探究の時間ワーキンググループ（第８回）【資料 2-1】生活、総合的な学習・探究の時間 WG 取りまとめ（案）②総合的な学習・探究の時間」
群馬県教育委員会（2022）『総合的な学習の時間で児童生徒も教師も楽しく探究！』
文部科学省（2017）『中学校学習指導要領　総則』
文部科学省（2017）「中学校学習指導要領解説　総合的な学習の時間編」
文部科学省（2022）『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』
中野真志・加藤智（2023）『資質・能力時代の総合的な学習の時間　知性と社会性と情動のパースペクティブ』三恵社

あ と が き

本校では、附属学校園の共同研究主題「自ら人生を描き、共に未来を創る学び手の育成」の下、「実現したい未来に向けて責任をもって挑戦することができる生徒の育成」を研究主題に掲げ、３年間を見通して研究を進めてまいりました。本研究の背景には、変化が激しく、容易に最適解を見いだすことのできない社会にあっても、生徒が自らの願いや価値観を基に実現したい未来を描き、その実現に向けて学びを方向付け、他者と協働しながら粘り強く行動していくことが必要であるという認識があります。そこで本校では、OECD ラーニング・コンパスが示す AAR サイクルを手掛かりとして、生徒が学びの主体としてエージェンシーを発揮する探究的な学びの在り方を追究してきました。

これまでの２年間の取組を通して、生徒が自ら課題を見いだし、学び方を選びながら主体的に探究する姿が見られるようになった一方、その学びを一過性の活動で終わらせず、獲得した知識や考えを関連付け、その意味や価値を捉え直して、次の学びへつなげていくことの重要性が明らかになりました。そこで、研究の最終年となる本年度は、副主題を「エージェンシーを発揮し、振り返りをもとに自ら深める探究的な学び」と設定し、AAR サイクルの「振り返り」に焦点を当てました。生徒が探究の過程や成果を振り返り、自らの学びの変容を自覚するとともに、得られた知識や考えを活用し、新たな問いや次の学びへの見通しを生み出すことによって、探究的な学びを更に深めていくことを目指しています。

生成 AI がもっともらしい答えを瞬時に示す時代には、自ら目的や問いを定め、情報を吟味し、判断に責任をもつ力が必要です。また、学び方の多様化に応じた選択肢と、他者と共に学べる環境も欠かせません。さらに、ウェルビーイングや持続可能性、民主的な社会の実現には、学びを社会のよりよい変化へ結び付ける経験が求められます。これらの教育的要請に対し、本研究のエージェンシーは責任ある判断に、生徒がデザインする探究は多様な学び方の保障に、振り返りは深い学びに、対話と協働は共に未来を創る力につながります。本研究は、次期学習指導要領が掲げる「深い学びの実装」「多様性の包摂」「実現可能性」を、日常の教育課程で具現化しようとするものです。

こうした考えのもと、本校では、振り返りを単なる成果の確認で終わらせず、生徒が学びの過程を捉え直し、知識や考えを関連付け、次の問いや行動へつなげるための単元・題材の構成を追究してきました。また、振り返りの視点を明確にするとともに、対話を通して考えを広げたり深めたりする場を設定するなど、各教科等において実践と検証を重ねてまいりました。教職員が教科の枠を越えて生徒の姿を基に協議し、授業改善を積み重ねてきた成果と課題を皆様と共有し、更に研究を前に進める機会として、本日の公開研究会を迎えております。御参会の皆様には、本校の実践について忌憚のないご意見、ご助言をお寄せいただき、今後の研究を深めるためのお力添えを賜れれば幸いです。

結びに、本研究を進めるにあたり、文部科学省・国立教育政策研究所、群馬県教育委員会、関係市町村教育委員会、群馬大学共同教育学部並びに全国学校体育研究大会関係者の皆様をはじめ、多くの方々から温かな御指導と御支援を賜りましたことに、心より御礼申し上げます。本紀要及び本研究会が、御参会の皆様の教育実践を更に充実させ、これからの学校教育を共に創っていくための一助となれば幸いです。

令和８年 10 月

群馬大学共同教育学部附属中学校
教 頭　三 好 和 人

＜研究に携わった者＞

校　　長	栗本　郁夫		教　　諭	金井　亨平（保体）
教　　頭	三好　和人		〃	齋藤梨花子（保体）
主幹教諭	千明　　隼（社会）		〃	山﨑　　真（技術）
教務主任	生方　佑樹（社会）		〃	大竹　成美（家庭科）
研究主任	櫻井　康之（理科）		〃	瀬戸　辰徳（英語）
教　　諭	高橋　正人（国語）		〃	小野里健太（英語）
〃	新井　英雄（国語）		〃	阿部　広彩（英語）
〃	佐藤誠一郎（国語）		養護教諭	越田妃奈乃
〃	剣持　智之（社会）		（令和７年度）	
〃	高山　慶介（数学）		教　　諭	岡田　尚子（英語）
〃	山口　智也（数学）		（令和６年度）	
〃	宇賀神啓資（数学）		校　　長	上原　永次
〃	斉藤　剛志（理科）		副 校 長	佐野　美幸
〃	木村　貴博（理科）		校内教頭	関根　直哉
〃	羽鳥　文仁（音楽）		研究主任	星野　勇希（音楽）
〃	多胡　慎平（美術）		教　　諭	久保　涼子（保体）
			養護教諭	稲村　瑞希